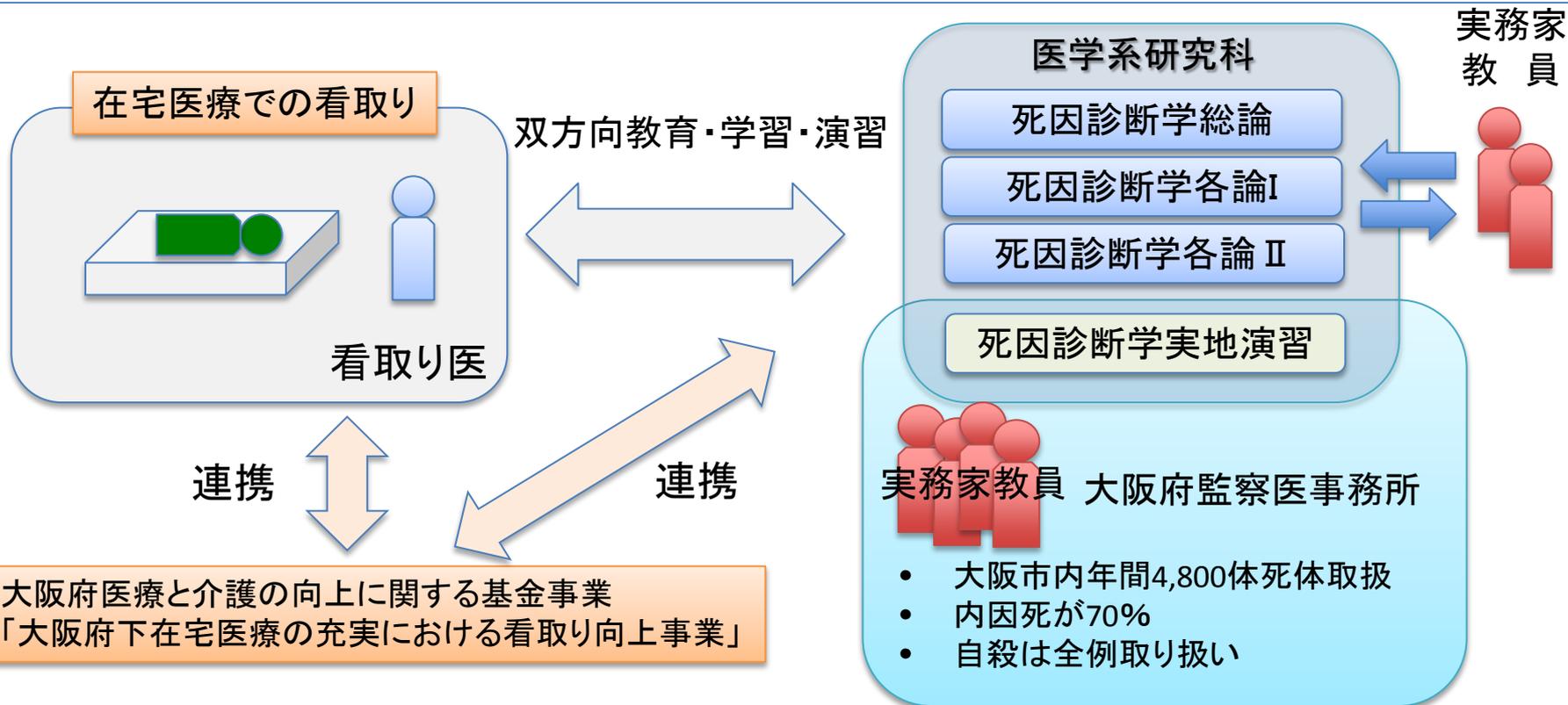




大阪大学大学院医学系研究科 科目等履修生高度プログラム 「在宅医療の充実における看取り向上のための検案能の涵養」

これからの多死社会において、在宅医療がますます増えると予想される。このプログラムは在宅医療にあたっており、看取り医として活躍されているあるいはこれから従事しようとしている医師を対象に最後の看取りを行った際の死因診断についてその能力をつけていただくプログラムである。「死因診断学総論」と「死因診断学各論」では死体所見の取り方と所見の医学的意義、死亡機序、所見から総合して死因診断を行う能力と鑑別診断等が可能な力を養う。さらに、ご自宅で最後を迎える方々が安心して死を迎えられる技量と安心して看取りを任せられる死因診断能力の涵養を目指すため、実地演習として西日本で唯一の専門機関である大阪府監察医事務所をその場を設定しにその実地能力を向上させる演習を含んでいることがこのプログラムの最大の特徴でもある。また、大阪府の医療と介護の向上に関する基金事業「大阪府下在宅医療の充実における看取り向上事業」とも連携を強め、高度職業専門職の養成を行う。看取り医は、死亡後に連絡を受けた場合、高度な専門職技能である検案能力を持っていないと死因診断に苦慮する場合があります、場合によっては誤診してしまう可能性や潜む犯罪行為を見逃す可能性もあり、また適切な死亡診断書・死体検案書も公布しなければならない。そこで、このプログラムを受講することで科学的な検案をして正確に死因を診断しかつ書類を作成する技量の向上を図る。このことは、大阪大学の理念「物事の本質を見極める学問と教育が大学の使命であり、この使命を果たすことで大学は社会に貢献していく」のもと、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、次代の社会を支え、人類の理想の実現をはかる有能な人材を社会に輩出することという教育目標に合致している。



- 大阪市内年間4,800体死体取扱
- 内因死が70%
- 自殺は全例取り扱い